

第35回新人シナリオコンクール応募作品

「よるのまふ」

登場人物表

稲葉 晴(22) 恋人を事故で亡くした青年
向井 修(36) 移植コーディネイター
向井翔 (6) 入院患者 肝臓病
向井麻里子(33) 翔の母親
ブンバ(22) 晴の友人
町田ひとみ(22) 晴の同級生
佐久間陽介(20) 晴の職場の後輩
長谷川和巳(55) 社長 ※腎臓移植
三谷 (40) 事務
君下 (48) 水泳クラブ ※腎臓移植
佐藤千砂(15) 水泳クラブ ※心臓移植
千砂母(40) 千砂の母
広田あいり(24) 向井の臨時アシスタント
幸田 (38) 臓器移植ネットワーク職員
青年 (19) バックパッカー
森崎父 (50) すみれの父
森崎母 (47) すみれの母

あらずじ

森崎すみれとの別れは突然だった。

恋人の稲葉晴は突然の別れを受け入れることなどできなかった。すみれは生前ドナー登録をしており、両親の意向で心停止後臓器移植を行うことになった。

臓器移植には、「死体臓器移植」と「生体臓器移植」がある。「死体臓器移植」には「脳死下臓器移植」という脳が完全に機能しなくなった脳死状態の人を対象に、心臓、肺、肝臓、腎臓、膵臓など心停止後臓器移植より移植できる臓器が多いが、心臓がまだ拍動しており、晴にはどうしても死を納得できないまま手術が行われてしまった。

失意の中、自暴自棄に過ごしていた頃、家賃の督促状が届く。一人で払うには多すぎる額に転居を決意する。

不動産屋を出ると、同僚の佐久間に出会う。長く休職していたことを平謝りする、佐久間に社長の長谷川が入院したことを聞かされる。

病室の戸を開けると、いつもより小さく見える社長がいた。素直に休んでいた経緯を吐露すると、社長は以前に臓器移植した時の傷跡を見せた。移植には色々な種類があり、晴にも知ってもらいたいからと移植者スイミングクラブの記録を頼む。

クラブの記録をするうちに、千砂という少女と出会う。

この子は心臓移植を受けたスーパーラッキーガールだと紹介される。皆の様子を記録しているとその写真の腕前に頼ってコーディネーターの向かいがスポーツ大会の広報写真を依頼する。晴はこれを快諾する。

大会の後、車中で向井が千砂のドナーがカメラマンであると教えてくれた。手術と同時期になくなったすみれの名前が晴の口から出ると向井の表情が一変する。

千砂のドナーになったのは森崎すみれであった。

○明和病院 移植センター

啓発チラシをティッシュに封入する向井

と広田 固定電話がなる

向井 「はい 明和病院移植センター向井です」

幸田 「移植ネットの幸田です

先ごろ、ドナーが現れました

明和病院に入院中の佐藤千砂さんが

レシピエント候補になりました

至急、主治医とご家族への

連絡をお願いいたします

詳細は追ってお知らせいたします」

電話を切る向井

向井 「ドナー現れました！

あいりちゃん喜多先生さがして」

広田 「えっ あっ はい！」

XXX

各所に連絡を入れ資料作りをする向井

XXX

千砂に移植手術を受けるかの意思確認
をする広田

泣き崩れる千砂の母

○同
ヘリポート

遠くの空にヘリの音が聞こえる

次第に大きくなる機影

大風を起こし降り立つ

銀色の保冷バックを抱えたコーディネイ

ターが一足先に降りる

向井に案内され院内へと通される

○同 手術室前

バックを医師に引き渡す

頭を下げるコーデイネイター

○同 手術室

心臓移植手術

XXX

生着した心臓が鼓動を鳴らす

○同 移植センター

報告を受け、沸くスタッフ一同

PCモニターを見つめ黙る広田

向井 「あいりちゃん どうしたの？」

広田 「いえ ただ 同じ年だなんて」

向井 「…？」

広田 「手術うまくいってよかったです」

ドナー情報 年齢23 女性 脳死

○同 移植センター

時刻は午前3時を示している

ソファで仮眠をとっていた向井が起きる

スマホに妻から動画メッセージ

妻 「ねえ 何が見えるの

こつちむいてよ

もー そんな顔しないの

パパになにか一言ない？」

走り去る息子の姿が映っている

妻 「以上 京都からでした

また送るね」

巡回していた看護婦が気づく

看護婦 「風邪引きますよ」

向井 「ありがとう 仮眠室いくよ」

看護婦 「生着うまくいったみたいですね」

向井 「そうだね 僕らはここからが仕事だから」

看護婦 「先生 頑張りすぎですよ」

向井 「今は先生じゃないよ」

看護婦 「わかってますよ」

○結婚式場

新郎新婦のダイジェストムービーが

プロジェクトションされている

幼少の新郎の写真

(野菜を口にして泣いている)

以下ナレーション

ナレ 「新郎は根っからの野菜嫌い…」

会場の照明が落ちる

ライオンキングのテイモンとペンバのコスプレをした晴と友人が入り口から現れる

晴 「ハクナマタタ！」

ライオンキングのハクナマタタを歌いながら大量の野菜を乗せた皿を運ぶ二人

ペンバ 「ハクナマタタさ やなことは忘れろ」

晴 「ハクナマタタ なんていい響きなんだ」

ペンバ 「ハクナマタタ 愛のメッセ〜ジ」

晴 「悩まずに生きることさー 俺たちの

この知識 ハクナマタタ」

新郎にシンバのカツラとヘッドセットをつける晴

新郎 「ハクナマタタ？」

ブンバ 「俺たちのモットーだよ」

新郎 「えっ モットー？」

晴 「もつと 教えて欲しいか？」

ブンバ 「いいかい坊やこの言葉で悩みなんて

綺麗にふつとんじゃうのさ」

歌う3人

3人 「ハクナマタタ いい響き

ハクナマタタ 愛のメッセージ」

ブンバ 「げっふ ハラヘッタ」

新郎 「でつかいシマウマを食べたいね」

晴 「ええ シマウマはネタ切れだよ」

新郎 「レイオウは？」

晴 「ないね」

新郎 「カバは？」

晴 「無い なあ坊や

この人と暮らすんなら食い物も一緒だ」

新婦の肩に手を添える晴

晴

「よしそれじゃ この辺で昼飯にするか」

大皿の野菜を掲げる友人

新郎

「えー…なにそれ…」

晴

「野菜だよ ステーキに見えるのか」

新郎

「ゲエ やだ」

晴

「食ってみな」

会場が明るくなる

躊躇しつつピーマンを一口で食べる

新郎

「のどごし さわさかだね」

大爆笑の会場

ピーマンを配りながら

ハクナマタタを歌い去る
テイモンとブンバ

○電車

コスプレ衣装のまま友人たちと盛り上
がる晴

駅に停車する

ブンバ姿の友人一同と別れる

同級生の町田と二人になる

町田 「いっしょにいるの恥ずいんだけど」

晴 「ハクナマタタさ」

町田 「2年の時の文化祭でしょ」

晴 「覚えてる？」

町田 「私 見にいったもん」

次の駅に停車する

魔女のコスプレをした人が乗車する

町田 「ああ ハロウィンだね」

晴 「そつか 奇遇だなあとか思ってた」

町田 「なにそれ ウケる」

次第に仮装姿の客が増える

町田 「ねえ 渋谷行ってみない？」

○渋谷スクランブル前

10月31日、ハロウインの喧騒

魔女 ゾンビ マリオ キョンシー

ジャックランタン テイモン

交差点そばの銅像によじ登る晴

マクドナルドの紙袋を被っている町田

町田 「ちよつと！ 何やってんの」

晴 「ハクナマタタさ！」

町田 「なにそれ？」

晴 「問題ないさささ！」

町田 「ウケる 問題だらけじゃん」

奇声を発して交差点にかけていく

大爆笑の町田

○センター街

仮装行列に紛れる晴と町田

行き交う人々

魔女 ゾンビ マリオ キョンシー

ジャックランタン 魔法少女

無関心なビジネスマン

○クラブ

バーカウンターでショットグラス煽る

タバコをふかし笑っている町田

XXXX

踊り狂う晴

時折、客とぶつかりよろける

XXX

ダンスホールでうづくまる晴

顔を覗き込む町田

キスをする

○商店街

空が白み出している

ゴミが散乱する商店街を腕を絡めて歩

く二人

○サイクリングロード

ジョギングや犬の散歩する人たちと

すれ違う、地べたに座り込む町田

町田 「ねー 結婚しよーよーよ」

前を歩く晴の背に飛び乗る

ほほに軽くキスをする

立ち止まる晴

町田 「なんだよー いいじゃんかよ」

晴 「…」

町田 「なんか言っつてよ」

放心状態の晴

町田 「ねえ 大丈夫？」

晴 「…大丈夫じゃない」

町田 「えっ？」

晴 「…全然…大丈夫じゃないから」

テイモンのカツラを投げ捨て

町田を残し歩きだす

町田 「なんなの？ なんなんですかー」

薄暮、夜が終わる

○晴の家 リビング

毛布に包まる晴

陽光が差し、目を覚ます

散乱するビール缶や溜まったゴミ袋

コップに水道水を注ぎ、飲み干す

鏡に自分の姿が見える

昨夜のメイクをすすぎ落とす

×××

サッカーゲーム

テレビの側の枯れたサボテンが

目にはいる

先制点を決められる

放心しているうちにゲームセットになる

○同 玄関

カタンつと玄関戸から音がする
戸には紙が差し込まれている
不動産屋から家賃の督促
2ヶ月分で22万の振り込みをと書かれて
いる 深くため息が漏れる晴

○同 リビング

部屋の遺品たちを段ボールに詰める
フィギュア 歯ブラシ 食器 本 etc

○同 現像室 (2F)

暗幕で覆われた小部屋を解体する
現像タンク、写真用具を片す
大量の印画紙が見つかる
花 犬 猫 晴の寝顔
手が止まる

薄暗い部屋でうずくまる

○コンビニ ATM前

振り込み完了

残高18万ちよつと

ため息が溢れる

○不動産屋 前

ワンルームの物件情報を眺めていると

佐久間が彼女を伴って店から出てくる

佐久間 「晴さん？」

晴さんじゃないっすか」

晴 「えっ ああ 久しぶり」

佐久間 「久しぶり！ じゃないっすよ！

晴さんぶつちこいて2ヶ月くらい

すよ 嘘 マジ でもよかった」

晴 「ああ うん ごめんな」

佐久間 「ごめんて もう何してたんっすか

会社いま大変なんすよ

社長倒れて 晴さん消えるし

あともう 色々っすよ」

晴 「えっ 倒れたって？」

佐久間 「晴さん来なくなつた 次の日に

元々、持病があつたらしくて

社長飲まないじゃ無いっすか

元々、腎臓が悪かつたらしくて

なんだかんだワンマンだから

うちの会社やばくなつて

晴さん探すどころじゃなくて」

晴 「…」

佐久間 「俺 マジ 心配だつたんすよ

偶に家まで行つたんすけどカーテン

しまつてたからもういないのかもつて

マジで死亡説出てますからね」

笑っている晴

晴 「…死んでたかも」

佐久間 「とにかく明日から会社来てくださいよ

林さんがいばり散らして雰囲気わるいん
すよ」

晴 「いや 流石にクビだろ」

佐久間 「机ありますから 社長が残せつて」

晴 「なんかごめんな」

佐久間 「そうすよ みんな心配してるんだから」

晴 「週明けには一回顔出すよ」

佐久間 「ええ またぶつちこく気ですか」

晴 「訳はまず社長に話すよ」

とりあえず住むところ探さないと」

佐久間 「でかい一軒家住んでるじゃないすか

彼女さんと」

晴 「出てったんだよ なんかに 急に」

佐久間 「それが理由つすか」

晴 「まあ そんなところ 一人じゃ家賃払
えないから」

佐久間 「ちなみになんすけど 間取りは？」

晴 「4LDK 月11万」

佐久間 「…ちよつと 待つてくださいなね」

離れたところにいた彼女を説得する佐久間

○ハルの家

佐久間 「おじゃまします」

晴 「まだ散らかってるから」

ゴミ袋の山を前に怪訝な佐久間の彼女

佐久間 「広いじゃないっすか

いいっすね レトロっというか」

晴 「古いつていうか」

佐久間 「僕は好きっすよ」

晴 「ちゃんと片付けたら見にくるか」

佐久間 「ちゃんと片付けてくださいよ」

晴 「悪かったな」

壁に飾られた写真を眺めてる彼女

佐久間 「写真とか撮るんっすか 以外」

彼女 「ちよつと！」

晴 「俺が撮ったやつじゃないよ」

佐久間 「ああ すんません」

晴 「氣いったのあつたら持つていってよ」

軽く会釈する彼女

しげしげと眺め出すふたり

何枚か指をさし、盛り上がっている

佐久間 「いいね プロが撮ったみたい」

二人の様子を見つめる晴

XXX

部屋を片付ける晴

○車内

佐久間がハンドルを握り、助手席に座る晴
和菓子屋の看板が目に入る

晴 「ちよつと寄つていいか？」

佐久間 「どこいくんすか？ もうすぐ病院着き
ますよ」

晴 「手ぶらつて訳にもいかないだろ」

佐久間 「ああ でも食べ物はダメつすよ」

晴 「そうなの？」

佐久間 「なんだっけ 腎臓の病気だから食事
制限でしたっけ？ 病院食しかたべら
れないみたいで」

晴 「腎臓…知らなかった」

佐久間 「前にすつごい量の薬飲んでたところ見
たことあつたんで気にはなつていた
んですけど

倒れた時はマジビビりましたよ」

流れる景色を見つめる晴

○病院 エントランス

入るのを躊躇する晴

佐久間 「さあ 腹くくりましょうよ」

晴 「…」

佐久間 「どうしたんすか？

お腹いたいんすか？

大丈夫ですって社長以外とやさしい

人だから」

晴の背を押す佐久間

○同 ロビー

ロビーでソファに座っている晴

面会手続きをしている佐久間

佐久間 「行きますよ」

晴 「慣れてるな」

佐久間 「僕が業務報告やらされてるので

週3は来てます

これも勉強だとか林さんに面倒押し

付けられて

あつ 来週からは分担しましょうよ

復帰するんすよね？」

晴 「いや まだ…」

佐久間 「ここまで来たんだから」

晴 「…」

佐久間 「なにしてるんすか？」

晴 「嫌いなんだよ 病院」

佐久間 「晴さんが病気なわけじゃないんだ

から ほら行きましょうよ」

先を歩く佐久間

少し遅れてついていく

○長谷川の病室

ノックをする佐久間

おうつと返事がする

佐久間 「お疲れ様です」

長谷川 「おう 入れ」

扉の奥に晴の姿を見つける

長谷川 「お客さんもいつしよだな」

佐久間 「入ってくださいいよ 晴さん」

長谷川と目があう

深くお辞儀をする

長谷川 「先に報告の方な

晴はちよつと待つてろ」

淡々と業務報告をする佐久間

部屋の隅で待つ晴

XXX

書類から顔を上げる長谷川

長谷川 「サク 今日をよくまとまってるな」

佐久間 「お客さま待たせているので」

長谷川 「こいつ笑 いいぞ 少し外してくれるか？」

手を振り退出する佐久間

長谷川 「いつまでそんな隅っこいるんだ

こつち来い」

ベット脇の椅子に座る

長谷川 「…」

晴 「…」

長谷川 「少し痩せたか？」

晴 「どうですかね？」

長谷川 「…そうか」

晴 「あの…サクから倒れたって聞いて」

長谷川 「ああ 今度ばかりは長く無いかもつて医者に言われちったよ」

晴 「俺…あの…全然知らなくって」

長谷川 「7年前にな お前が入社する前くらいに移植受けたんだ

好き勝手してたからバチが当たったのかもな」

晴 「…移植」

病院服をめくり腹部の手術あとを見せる長谷川

長谷川 「でっけー傷だろ」

晴 「…」

長谷川 「兄貴のな腎臓もらって生きながらえた」

晴 「移植すれば治るんじゃないんですか？」

長谷川 「そんな簡単なもんじゃなかったよ

移植された臓器っていつてもな元は
人様のモノだ

そいつが体の中になると俺の体はな
んか違うって攻撃するんだ

拒絶反応っていうんだがよ

今はもう薬で抑えきれなくなった」

傷口をさする長谷川

長谷川 「また人様のモノもらうのもなって

思っちゃまってよ」

晴 「そんなの意味ないじゃないですか」

長谷川 「そうかもな」

晴 「…治らないなら移植なんて意味ない
です」

長谷川 「…晴？」

蒼白した晴

手が震えている

晴

「生きてる人を殺してまですることですか？ 移植してしなくちゃいけなかったんですか？ もつと他にいい方法とかないんですか…」

長谷川「…」

晴

「心臓も動いてた！

手だって暖かったのに…

脳が死んだなんて言われても

わかんないし

納得できなくて…

俺…待つのに…何年だって

何十年だって待てるのに」

長谷川

「…大事な人だったのか？」

頷く晴

○病室 (回想)

規則的な呼吸器のリズム

心電図が鼓動を示している

彼女の手を握る晴

眠っているような穏やかな表情

彼女の両親が晴を呼んでいる

XXX

晴 「脳死：脳死ってなんですか？」

医師 「現在、大脳皮質が融解を

はじめており、CT画像をみても…」

CT画像を見せる (シワのない大脳)

医師 「ポイント オブ ノー リターン

つまり回復の余地がなく、意識を取り戻すことのない段階まできている可能性が高いです」

晴 「でも生きてますよね：手も暖かいし
心臓も動いています」

医師 「現在は人工呼吸器と昇圧剤による延
命治療をしている段階です
残念ですが

数日から数週間で心音は止みます」

晴 「…」

医師 「ご両親とお話しして、臓器移植を進
めることになりました

これから脳死であるという確認テス
トを行います

テストは6時間の間をあげ計二回行
われます

このテストで反応が見られなかった
場合、医学的な死亡が確定されます」

晴 「…医学的…？」

医師 「幸いドナー登録をされており、
臓器提供意思を示されています

ご両親に承諾を得ており脳死判定が

降ればドナーとして臓器提供を行う
運びになります」

×××

脳死判定1回目

医師 「反応みられません」

×××

2回目の脳死判定

晴 「…やめてください」

父 「…晴くん？」

晴 「やめてください！」

医師を退け彼女の肩を掴む晴

晴 「目開けろよ！ なあ！」

止めに入る医師と看護師
強く彼女を揺さぶる晴

晴 「なんか言えよ！」

生きてるって言えよ！

なあ…頼むからさ…」

晴を引き剥がす彼女の父

一撃、拳を入れる

うなだれる晴、呼吸が浅い

父 「…出てってくれ…」

○長谷川の病室

深く頭を下げる晴

長谷川 「また来いよ 業務命令だ」

○晴の部屋

越して来て間もないワンルーム

解かれてない荷が積み上がっている

目覚ましが鳴る

カーテンを開ける 空は快晴

○晴の職場

ロッカールームで作業着を脱ぐ晴

晴 「すみません お先に失礼します」

皆がお疲れを返す

退社する晴

三谷 「すっかり元どおりって感じね」

佐久間 「三谷さん一番心配してたからね」

三谷 「やっぱり晴ちゃんいないとね」

佐久間 「好きだもんね」 三谷さん「

三谷 「え！ やっぱバレてた？」

佐久間 「晴さん 最近彼女と別れたらしいすよ」

三谷 「…」

佐久間 「えっ マジのやつ？」

佐久間に肩パンをお見舞いする

笑う二人

○プール 展望スペース

プールを一望できる展望スペース

晴と車椅子の長谷川

一番端のレーンには10〜60代くらいまでの6人がリレー形式の練習をしている
タイムを計っている長谷川

○ファミレス

お茶を飲んでる水泳クラブの面々

長谷川 「みんな 少しタイム上がったね」

君下 「ハセさんのタイムもいよいよ怪しん

じやない？」

長谷川 「本当 ちーちゃんにはそろそろ負け

ちゃうな」

隅でチーズケーキを食べていた千砂が

小さく会釈する

君下 「おいおいはオリンピックとか出ちや

う？」

千砂 「そんなの無理だよ」

長谷川 「それにしても上達が早いよ

ターンがいいね

こう水面が美しい」

千砂の母親が迎えにくる

千砂 「あつ お母さん」

千砂母 「みなさん 御世話様です」

晴に気づく母

千砂母 「あつ 新しい方？ 佐藤です」

長谷川 「そいつはウチの社員」

今日は私のお守りですよ」

君下 「ハセさん手がかかりそうだもんね」

長谷川 「君ちゃん それはないよ」

今日から私の代わりに顔出すから

なんでも言つて なんでもするから」

千砂母 「代わりつてお加減悪いんですか？」

長谷川 「どーもね 兄貴のはもうだめみたい

で 7年頑張ってくれました」

千砂母 「それじゃ また移植を…」

長谷川 「いやね もう十分かと」

君下 「えっ 会社はどうするの？」

長谷川 「こいつらがいるから

また透析生活に戻ろうかと」

君下 「登録はしないの？」

長谷川 「もう一回もらったからね

機会があるなら誰か別の人と思ってね」

沈む一同

長谷川 「兄貴の分まで生きてから」

君下 「ん？ ハセさん生体移植でしょ？」

長谷川 「あつ そうだまだ生きてたよアイツ」

おどける長谷川

君下 「冗談きつすぎ！

苦勞するよね 君も」

晴 「はあ…」

○プール

ドリンクサーバーが置かれたベンチ

小さな三脚に一眼レフ

ムービー記録をしてる晴

片手にはストップウォッチ

君下 「すごいカメラね」

晴 「知り合いの借りて来ました」

君下 「ハセさんはどう？」

晴 「あまり良くはないみたいで…」

君下 「そつか：私もね腎臓なの 母のをね」

晴 「みなさんが移植を受けられたのは聞いていました」

君下 「いるもんでしょ？ 身近に」

晴 「はい 全然知らなかったです」

君下 「でもね千砂ちゃんだけはスーパー
ラッキーガールなの」

晴 「スーパーラッキー？」

君下 「亡くなった方から移植を受けたのよ
あの子だけは」

晴 「…」

君下 「すごいことよね
動かなかった臓器を人のと換えるな
んて人間にできることなんだって」

千砂がプールに飛び込む

君下 「一度、余命宣告された人がこうして

プールで泳いでる

ベットから起き上がって仕事して勉

強して笑って泣いて…

やっぱりハセさんにはまだ諦めてほ

しくないな…

世界が違って見えるのよ

真っ暗な世界に…

扉が見えるみたいで…」

水面に飛沫が上がる

○長谷川の病室

水泳クラブの面々から長谷川へのビデオ

レター、最後に千砂の番がくる

モニターの中の千砂

千砂 「えーと 長谷川さんお久しぶりです

あつ でも 先週会いましたね

あの タイム伸びてもうちよつとで
50秒切れそうぞ

そう 今度大会出ることにしました
50メートル

長谷川さんも大会見来てください
またいつしよに泳ぎたいです」

カメラを晴に返す

晴 「また見れるようにしときますね」

長谷川 「綺麗にとれてるな」

晴 「∴知り合いに借りました」

長谷川 「今度よ 大会があるんだよ」

晴 「あつ 千砂ちゃんが言ってた水泳大
会ですか？」

長谷川 「移植者スポーツ大会」

晴 「∴移植者」

長谷川 「みんなのこと撮って来てくれるか？」

晴 「…」

長谷川 「もう外出はだめだよ」

晴 「…わかりました」

長谷川 「頼むな」

手をすり合わせ拌む長谷川

長谷川 「頼むな」

○晴の部屋

積み上がった段ボールを開く

いくつか開けて写真の本を出す

カメラを片手に読み進める

○作業現場

道具を片している佐久間

カメラを首に下げる晴

佐久間 「どこ行くんすか！」

手伝ってくださいよー」

晴 「悪い ちょっと待ってて」

現場を離れる晴

○車内

助手席で撮影したデータを確認している晴

ちらちら視線を向ける佐久間

佐久間 「どうしたんすか それ」

晴 「借りた」

佐久間 「写真なんかはじめて未練タラタラ

じゃないですか？」

晴 「：頼まれたんだよ 社長に」

佐久間 「また〜」

佐久間にレンズを向ける

満面の笑みとピース

カシヤ

晴 「前見ろよ」

○プール

ベンチに座って記録を取っている晴
スーツ姿の向井が近寄ってくる

向井 「となりいいですか？」

晴 「どうぞ」

向井 「…」

晴 「…」

向井 「あっ 私 移植コーディネイター
の向井と申します」

晴 「えつと 稲葉です」

向井 「長谷川さんの知り合いの方だと…」

晴 「はい ボランテニアというか業務命令
といますか…」

向井 「そうでしたか…」

三脚のカメラを見る向井

向井 「すごいカメラですね？」

晴 「あつ はい」

向井 「もしかしてプロの方だったり？」

晴 「そういうわけではないのですが」

向井 「そうですか」

飛沫が飛んでくる

向井 「信じられませんよね」

晴 「えっ？」

向井 「職業柄たくさんのお患者さんを見ていますが移植をするとこんなに元気になるんだって

ここに来るといつも新鮮な気持ちになるんですよ」

晴 「僕には…まだ皆さんが病気だったな

なんてどこか信じられません」

向井 「やっところここまで来たんですよ」

晴 「…」

向井 「まだまだこれからなんですけどね」

千砂が向井に気づく

千砂 「向井さん おひさしぶりです」

向井 「ひさしぶりだね どう調子は？」

千砂 「こっちは順調なんですけどね

今度の模試は自信なくて」

向井 「そうだ 大会参加するんだってね

エントリー用紙持って来たよ」

千砂 「ありがとうございます

でも大会は記念参加ですよ」

向井 「そうなの？」

千砂 「泳げるようになったって手紙に書き

たいし」

向井 「そっか」

千砂 「向井さんも大会来られるんですか？」

向井 「うん 今年はプールの担当に回して
もらえそうだよ」

千砂 「えっ 本当ですか？ 嬉しい」

向井 「でもよかったよ

水泳楽しく来れてるみたいで」

千砂 「最近 水泳のことしか話さないから

お母さんは勉強勉強って…」

談笑する二人をみつめる晴

○同 ロビー

千砂の母親が迎えに来る

円卓でクラブの面々が写真を見ている

千砂母 「千砂 お待たせ」

君下 「佐藤さん ちよつと」

机の上に晴が撮った練習風景の写真

君下 「晴くんがね 焼いてくれたのよ

これ佐藤家の分」

千砂母 「ああ ありがとうございます」

向井 「よく撮れてるでしょ？」

何枚か手に取る

千砂母 「晴さんってプロの方だったんですか？」

晴 「そんな：カメラがいいだけですよ」

君下 「そお？ 上手よ」

晴 「まだ勉強中で」

写真を見ている向井に気づく千砂母

千砂母 「向井さん いらしてたんですか！」

向井 「あつ お母さん ご無沙汰してます

これ電話でお話しさせてください

エントリーの用紙です

クラブの皆さんで参加されるという

ことでこちらにお伺いしました」

千砂母 「わざわざすみません」

XXX

お辞儀をし帰宅する千砂親子

小さく手を振る千砂

見送る晴

向井 「あの稲葉さん ちょっと」

XXX

晴 「広報誌ですか？」

向井 「ええ 移植ネットワークが発行してる

機関紙なのですが予算の都合でプロの方に発注できず…

ボランティアとして写真の記録をお願い
できませんでしょうか？」

晴 「…」

向井 「もちろんお礼としまして多少の報酬

はご用意できます

多くはないのですが」

晴 「スポーツ大会は何種目くらいあるのですか？」

向井 「今年は7種目、例年50〜70人程度の参加があります

もちろん全ての会場ではなく好きな

種目のみで構わないのですが…」

晴 「…是非：是非やらせてください
もちろん報酬は結構なので」

向井 「いえ そんな…」

晴 「僕でよければ撮ってみたいです」

頭をさげる晴

○中学校 視聴覚室

半年前

プロジェクトに移された移植の統計資料

30人ほどの生徒が聴講している

向井

「現在臓器移植希望者13471名

(2019/4月 現在)

昨年の年間移植件数358件

個別の件数では

心臓55 肺58 肝臓57

膵臓3 小腸3

腎臓148 内脳死下93

これは臓器単独でのデータになります

他にも心臓と肺、肝臓と腎臓など

複数の臓器を同時に移植するケース

もあるので358件の移植が

行われました(2018年度データ参照)

提供数は脳死下68心停止後29

計97名の提供がありました

確率にして約2〜3%と極めて少ない確率になります

また臓器ごとに登録されている方の数に偏りがあるので実際に臓器を受け取れるのは奇跡的確率になってしまいうのが今の日本の現状です」

最前列の女生徒が手を挙げている

女生徒 「どうしてそんなに少ないのですか？」

向井 「とても自然な疑問ですね

法律が整備されていない段階で行われた心臓移植の失敗で国民の不信感をおこしてしまつたのがまず挙げられます 加えてそれらの事例を踏まえて制定された基準が世界一厳しい法廷基準などといわれています まして一般に浸透しなくなった一因といわれています」

教室の隅でガタリと音がする

広田が椅子からずり落ちる

向井

「見てください 彼女疲れてますね

私たちコーディネイターもひとりではなく
さんの方のお手伝いをしなくてはならな
くなります 片時も携帯電話を手放せな
いって結構大変なんですよ」

よだれを拭き座り直す広田

忍笑いをする生徒たち

向井

「じゃ 眠たい広田さんのためにも教室を
暗くしてビデオを見ることにしましょう

あつ 大丈夫ですよ 手術のシーン

はないので血などが苦手な人もみられま
す これはメアリーというイギリス人カ
メラマンが移植を待つ女の子を写したド
キュメンタリー作品です

ドナー ドナー家族 レシピエント

ドクター コーデイネイターなどの関わ

り合いがわかりやすく記録されています」

プロジェクターにYoutubeのリンク

○車内

向井がハンドルを握っている

向井 「あいりちゃんさ 流石にまずいよ」

広田 「すみません やっぱ向いてないですつて」

向井 「それでいいの？ 看護師に戻るのもうちじゃ厳しいんでしょ？」

広田 「もうやめたも同然っていうか向井先生が拾ってくれなかったら

本当ただの無職女ですよね」

向井 「まだ早いんじゃない？

学校とは違うの当たり前前だけどき

頑張ってきたわけじゃない？

すぐに向いてないとか決めない方がいい

よ」

広田 「正直わたし苦手なんですよ

人が亡くなるの見るの實習とか研修とか
だましましたしやってきたけど…」

向井 「できる範囲でいいんだよ

コーデイネイターは処置に立ち会うわけ
じゃないから」

広田 「でも病院にいれば…医療に関わるってい
れば人が亡くなる場面を避けられないつ
てわかつちやったから」

向井 「それはそうだけど…」

広田 「すいません なんの役にも立てなくて」

向井 「そんなこと…」

広田 「あつ でももうちよつと頑張ります
今度バリ行くんですよね
水着も買っちゃおうかな」

携帯を見ている広田

○駅前広場

ティッシュ配りをしている向井と広田

向井 「ドナー登録のご協力お願いします」

ダンボールの横でうつむいている広田

向井 「今も移植を待っているたくさんの

方々の為に お願いします」

無関心な通行人

○喫茶店

大盛りナポリタンを味わう向井

手をつけない広田

向井 「冷めちゃうよ」

広田 「…」

向井 「学生の頃よく食べててさ」

懐かしくなっちゃって」

広田 「…」

向井 「やっぱりしんどい？」

広田 「…はい」

向井 「そっか」

広田 「すみません」

向井 「ほら 一口食べてみてよ

おいしいよ」

○明和病院 移植センター

広田のデスクに置かれた辞表

それをみつめる向井

○移植センター

向井とレシピエントの佐藤千砂とその

母親が話している

向井 「経過も良好そうでした」

母親 「おかげさまで ただ近頃、家にもってしまつて」

向井 「受験勉強でしょうか？」

母親 「週に2度塾に行く以外はあまり外出をしたくないと」

向井 「手術から2ヶ月経ちますので、運動も含め入院以前と変わらない生活を送つても問題ありませんよ」

母親 「先生からお話して頂いて理解はしているつもりなのですが…
ただ本人の気持ちに向かないと言いましょうか」

千砂を一瞥する母親

俯く千砂

向井 「そうだ ちょっと待ってください」

奥から大量の広報誌とDVDプレイヤー
を持つてくる

モニターに映される移植者スポーツ大会の記録映像

陸上 水泳 バトミントンなど

千砂 「…水泳もできるんですか？」

向井 「もちろん」

千砂 「私 水泳したいです」

母親 「泳いでも大丈夫なのでしょうか？」

この子心臓だから激しい運動は心配で

向井 「初めはゆっくり体力を戻すところから

始めましょう

筋力が戻ってきたら水泳を始めてみ

てはどうでしょうか？」

母親 「千砂 できそう？」

食い入るように映像を見る千砂

母親 「千砂？」

千砂 「できるよ 頑張ってみる」

○佐藤家 リビング

朝食をとる千砂

千砂 「お母さん おかわり」

母親 「えっ？」

千砂 「おかわり ちょうだい」

米をよそう

千砂 「今日も少し運動してくるね」

母親 「大丈夫なの？」

千砂 「うん 大丈夫」

母親 「薬 忘れないでね」

千砂 「うん」

テーブルの隅に数種類の菓

○道

トレーニングウェア姿の千砂
ゆつくりランニングを始める
木漏れ日、早朝の冷たい風
千砂の口元に笑みが見える

○移植センター

電話をする向井

向井 「ご無沙汰しております

明和病院移植センター向井です」

君下 「あら 先生 ご無沙汰しております」

向井 「どうですか 最近は？」

君下 「元気に過ごさせて頂いております

来週定期健診でお伺いしますので」

向井 「お元気そうでなによりです

今日は君下さんが通ってる水泳クラブについてお伺いしたくてお電話さ

せていただきました」

君下 「水泳クラブですか？」

向井 「ええ 今度新しく受け持つことになったレシピエントの女の子が水泳がしたいとおしゃってまして」

君下 「そうなの 是非遊びに来てください
おじさんとおばさんばっかだから
ちよつと抵抗あるかもしれないけど」

向井 「私営のプールでしたっけ？」

君下 「そう 今週は木曜だからね」

向井 「木曜だと…ああ 予定空いてるので
僕も見に行こうかな」

君下 「是非来てください」

代表には私から連絡しとくわ」

向井 「ありがとうございます」

君下 「ところでどんな子なのかしら？」

向井 「2ヶ月前に心臓移植を受けた中学生の…
いえ正確には高校浪人生なんですけど
最近引きこもり気味で運動させるにもど

の程度できるか相談されまして」

君下 「心臓移植ですか!？」

向井 「珍しいでしょ？」

君下 「ラッキーガールね」

向井 「ええ ラッキーガールです」

君下 「水着は買ったほうがいいかもね」

向井 「え？ どうしてですか？」

君下 「女の子よ 傷は見せたくないでしょ？」

競技用なんてちようどいいんじゃないか

しら？」

向井 「そこまで気が回りませんでした」

君下 「私のは贅肉隠しだけどね」

受話器から君下の大きな笑い声が聞こえる

○プール

人気のない館内

向井と千砂の母親がプールサイドにいる

母親 「プールの水の衛生面は大丈夫なので
しょうか？」

向井 「このプールはレジオネラ菌など感
染症を起こす細菌類の検査まで徹底
的におこなっているので屋外のプー
ルなどより安全ですよ」

母親 「レジオネラですか？」

向井 「肺炎や高熱などの原疾患になる細菌で
す」

母親 「なるほど
でも向井さんが同行してくれて本当
心強いです」

向井 「今までとは違うのでご心労のことではし
ょう そのための我々コーデイネイターで
もあるのです」

更衣室から千砂と君下が出てくる

君下 「さあ 先ずは準備運動」

準備運動をする千砂と君下

二人の様子を見つめる母親の目に涙が
滲んでいる

母親 「嘘みたいですね

もう泳ぐことも走ることもしかないっ

て思ってたから…

あの子の変化に私がついていけなくて」

ティッシュを差し出す向井

向井 「千砂ちゃんはスーパーキーガールです
からね」

君下の先導で千砂がプールに入る

君下 「大丈夫そう？」

水の感触を確認すると仰向けになり
ゆっくり泳ぎだす

小さな波が水面を揺らしている

○移植センター

机で向き合う向井と千砂

千砂 「サックスレター？」

向井 「そう サックスレター

レシピエントがドナー家族に送る

感謝の手紙

どうかかな 水泳も初めたし人生が

一変したって手紙で伝えてみない？」

千砂 「…」

向井 「…千砂ちゃん？」

千砂 「私に心臓をくれた人はどんなひと

だったんですか？」

向井 「…ごめんね それは教えてはいけな

い決まりなんだ」

千砂 「向井さんは手紙書いたことあります

か？」

向井 「…あるよ」

千砂 「手紙ってその人のことを思って書くものじゃないですか？」

向井 「そうだね」

千砂 「手紙書きたいです でも誰に書いてるのかわからないとどう書いていいかわからなくて」

向井 「そうだよね」

でもあせらなくていいよ

少しずつ自分の体や日常がどう変わる

わったのか見つけるところから始めよう」

千砂 「はい」

向井 「…」

XXX

PCモニターには千砂のドナー情報が表示されている

23歳 女性 脳死

移植ネットに電話をかける向井

向井 「お世話になっております

私、明和病院移植センター向井と申
します

幸田さんいらしゃいますか？」

幸田 「ああ 向井さん 幸田です」

向井 「ちよつとお伺いしたいことがあります
して」

幸田 「はい？」

向井 「八月にうちで行なった心臓移植覚え
てますか？」

幸田 「ええ もちろん」

向井 「私がレシピエントの担当になったの
ですがどうしてもドナーのことを知
りたいと言つてまして…

もちろん本人に伝えるつもりはない
のですが…」

幸田 「ちよつと待つてくださいいね

…あつた八月六日ですね

摘出は東京の東部大ですね

えつと…もしかして向井さん

お知り合いですか？」

向井 「いえ…そのはずはないですが…」

幸田 「思い出しました この間の写真展に

参加してた人ですよ」

向井 「写真展ですか？」

幸田 「CMやってたじゃないですか

私はしました ドナー登録どなって

うちでも話題になったんですよ」

向井 「近頃テレビ見ないものですから…」

幸田 「そうだ ちょうど先週こつちに写真

集届いたんですよ たくさんあるの

で何部か明和さんにも送りますよ」

向井 「はあ…ありがとうございます」

XXXX

後日

外回りから帰ってくる向井

事務員 「向井先生 お届け物」

移植ネットからの小包を受け取る

中には3冊の写真集が入っている

“Catch Me!”という題名がつけられた写真集

移植を待つ子供達が写されている

本の最後の方に翔の写真を見つける

巻末に撮影者の名前が載っている

京都大学病院 撮影 森崎すみれ

担当コーディネーター 浅野翔子

受話器をとる

向井 「私 明和病院移植センター向井と申しま

す 浅野さんいらしゃいますか？」

○京都大学病院 翔の病室

看護日誌を読む向井

廊下を通りすぎる浅野が気づく

浅野 「それ一応機密よ」

看護日誌を指差す浅野

向井 「借りて来ちゃいました」

浅野 「この看護師も先生もあなたにあま
いのよね」

向井 「すみません」

浅野 「それで聞きたいことつてなに？」

カバンから写真集を取り出す

向井 「森崎すみれさんのことで」

浅野 「向井くんも知り合いだったの？」

向井 「いえ…今、受け持っているレシピエ

ントにこの写真展に参加した人の臓

器が移植されたって聞いて…

もしかしたらと思つて」

浅野 「…その、もしかしたらよ」

向井 「…そうでしたか」

浅野 「すみれちゃんね 生体移植申し出たの」

向井 「えっ！」

浅野 「何も聞いてないの？」

向井 「…はい」

浅野 「翔くんのこととは？」

向井 「…変わりないって」

浅野 「麻里子さん かなり参ってるよ」

向井 「…」

浅野 「向井くん なんでコーデイネーターになつたの？」

眠る翔の横顔を見る向井

浅野 「気が遠くなりそうよね」

向井 「：はい」

浅野 「いっとうなるか わからない

叶つても悲しむ人がいる

得られても安心はできない

なんなんだろうね 移植つて」

×××

窓の外を眺めている向井

麻里子が入室する

麻里子 「翔 入るよ」

向井に気づき足が止まる

麻里子 「どしたの？ 急ね」

向井 「京都タワー登らないか？」

麻里子 「え？」

向井 「3人で」

○京都タワー

エレベーターが開く

人のまばらな展望台

翔の車椅子を押す向井

麻里子 「思ったより低いのね」

向井 「そうかな？」

麻里子 「100メートルくらい？」

向井 「131メートル」

麻里子 「くわしいね」

向井 「見せてあげたかったんだよ」

麻里子 「翔に？」

向井 「そう 世界は広いぞって

あの山の奥にも人がいて

その先には海があつて外国があつて

たくさんの人が住んでいて」

虚ろな目の翔

向井が顔をよせる

向井 「ねえ 見えるだろ？」

家がたくさんあるね

あれは大きなお寺かな？」

麻里子 「…」

向井 「おとうさんな 翔が元気になるよう

頑張ってるから

もうちよつと待ってくれるか」

翔 「…」

向井 「元気になったら東京に行こう

もつともつと高いタワーに登ろう

そうだな 次は外国に行こう

でつかいハンバーガーを食べよう

それから…それから…

どこに行こうか…」

肩を震わす向井によりそう麻里子

虚空を見つめる翔

XXXXX

エレベーターを待っていると大きな
バックパックを背負った青年が目に入る
青年に駆け寄る向井

向井 「あの…すみません」

青年 「はい？」

XXX

青年の構えるスマホに収まる3人

青年 「じゃー撮りますよ

ハイ チーズ」

ぎこちない笑顔の向井親子

○京都駅

にぎわう夜の京都駅

麻里子 「次は来るときは電話くらいしてよ」

向井 「…うちの病院に移ろうか」

麻里子 「何よ 急に」

向井 「毎日会いに行くよ」

麻里子に口元に笑みが浮かぶ

○市民運動場

駐車場に一台のマイクロバスが止まる

白衣姿の向井が出迎える

向井 「おはようございます」

君下 「ひさしぶりね 白衣姿も」

向井 「今日だけ復職ですね」

向井にあいさつをしプールに向かう水

泳クラブ一同

向井 「晴くんはこつちね」

本部テントを指差す向井

○本部テント

報道の張り紙がされたテントには新聞
やテレビの報道マンが数人いる

“PRESS”と印字された腕章を渡される

向井 「水泳は午後からだから午前中は好き
に回ってください

これパンフレットね」

晴 「ありがとうございます」

向井 「休日に悪いね 無理言って」

晴 「…」

向井 「どうかした？」

晴 「カメラマンみたいだなって」

向井 「…？」

晴 「いえ なんでもないです

こちらこそよろしく願います」

○競技場

400mレーンに並ぶ子供達

ピストルの音で一斉にスタートを切る

男の子がテープをきる

会心の笑み

晴がシャッターを切る

XXX

小学生くらいの少女が走り出す

ぴよこんと30cmほどジャンプする

(幅跳びの砂場に届かない)

手を叩いて喜ぶ両親

シャッターを切る

○体育館

男女混成ペアがバドミントンの試合をしている

ポイントの取り合い

老年のペアが勝利を掴む

対戦者と握手を交わす

シャツターを切る

○運営テント

ボランティアスタッフがおにぎりを握っている

顔についた米粒を指摘され顔をほころ

ばすおばちゃん

シャツターを切る

○テニスコート

息を飲む打ち合い

足元を過ぎ去るリターンエース

悔しがる青年

シャツターを切る

○プール

息を切らして会場入りする晴

飛び込み台の君下が晴を見つける

小さなピースサインをしている

シャッターを切る

×××

千砂の番が来る

レーンに並ぶ6人の参加者

ピストルが響く

スタートは上々

先頭集団につける千紗

25メートル

トップに躍り出る

隣のレーンの参加者と一騎打ち

伸びのあるストローク

40m付近で二人が並ぶ

デットヒート

すんでのところで差し込まれる
水面から顔を出す千砂

ナレ 「二着 佐藤千砂さん 48秒26」

満面の笑みを浮かべる
シャッターを切る

×××

プールサイドに集まるクラブの面々
集合写真を撮る

三脚にカメラを据え、
輪に加わろうとする晴
視界が歪み、倒れこむ

○医務室

時刻が午後7…20を指している

目を覚ます晴

点滴の管が腕に伸びている

写真のデータをみている向井

向井 「目が覚めたみたいだね

気分はどうかかな？」

晴 「あの…俺…」

向井 「軽い貧血だね」

晴 「…」

向井 「今日ここに運ばれてきたのは君だけ
だったよ」

晴 「…すみません」

向井 「健康だどつい無理しちゃうよね」

晴 「夢中で撮ってたんで…」

向井 「ご飯は食べた？」

晴 「ああ…何も…」

向井 「どうだったスポーツ大会？」

晴 「…」

向井 「いい写真たくさん撮れてるよ」

向井からカメラを受け取る

向井 「ごめん 勝手に見ちゃって」

晴 「凄かったです

普通の人となにも変わらない」

写真データをスクロールする

向井 「ありがとう

君にお願いしてよかった」

お辞儀で返す晴

向井 「遅くなったから送ってくよ」

○車内

カーステレオから曲が流れている

四のゲートを抜け高速に乗る

しばらく走るとテールランプの赤が無数に見える

ラジオ「ここで渋滞情報です

トンネルを先頭に5キロの事故渋滞…」

向井「千砂ちゃんのドナーになった人は事故で亡くなったそうだ」

晴「…」

向井「まだ23だった
その人は僕にとっても恩人かもしれ
ないんだ」

晴「恩人ですか？」

向井「僕が医師になったのは26だった
同時に大学からの彼女と結婚して

30の時に息子が生まれた
でもその子には先天的な病気があったん
だ 胆道閉塞症³って言うんだけど難病
でね 今も命からがら移植の機会を待つ

てる

移植って国内ではなかなか受けられないから、少しでも機会を増やそうと思ってコーデイネイターに転職した医師として助けられる命より自分の子供を助けたいと思ってた

いつからかな…息子に会いに行く日が減っていたよ

無口な子でね

それに僕には懐かないときた
そんな僕の息子を撮りたがったカメラマンがいたんだ」

晴 「…カメラマン？」

向井 「そう…その人はカメラマンだった
移植を待つ子供の笑顔をテーマにした写真企画で病院に来ていた
でもうちの子はいつものむっとり顔
で写ってた

普通なら展示されることのないその

写真をどうしても載せてくれて
その人は言ってくれたんだ
たまたまその写真を目にしてね
妻と息子のいる京都に飛んでいった
その人が気づかせてくれたんだ
なんのためにこの仕事をしてるのか
忘れていたんだよ 大切なことを

晴の頬に涙が流れる

向井 「…晴くん？」

晴 「すみれ…森崎すみれ」

向井 「えっ…？」

晴 「その人の名前は…森崎すみれ」

向井 「知っているの？」

晴 「僕の彼女だった人です」

向井 「…」

晴 「脳死だって言われたってまるで眠っ
ているみたいで…」

よく寝たっていつもみたいに言いそう
で…

医学的死ってなんなんですかね？

回復しないなら死んだも同然ですか？

でも生きてたんですよ

薬とか呼吸器とかなんだって使えば

いいじゃないですか…

すみれじゃないとダメなんですか？

しゃべれなくなたって…

動けなくなたって、なんでもいいから

一日に一度でいいから…

移植してたくさんの方が助かるって

それくらいはわかりますよ

でも違うんですよ

助かって欲しいのは…」

「…」

向井
晴

「助かって欲しかったのは一人だから」

嗚咽を漏らす晴

前方の車列がゆっくり流れ出す

ラジオ「以上、トラフィックニュースでした」

○②中学校 教室

暗い教室、スクリーンを見つめる子供達

海外の移植者スポーツ大会の様子

走るサンデー、カメラで追うメリ

大会後の記念撮影

抱擁する二人

拍手が起こる教室、涙ぐむ生徒がいる

その様子をカメラに収める晴

○事務室

資料の入った段ボールを運ぶ向井と晴

向井 「ありがとう 助かるよ」

晴 「いえ これくらいは」

向井 「そうだ この間の写真が広報誌に使われたよ」

広報誌に差し出す向井

晴 「嬉しいですね 自分が撮ったのが載るって」

向井 「不思議な感じかな？ すみれさんの仕事引き継ぐみたいなの」

晴 「たまに変なところで立ち止まるんですよ 頭の中でシャッター切ってたのかなってカメラ始めてから彼女の行動がわかる時があつて今の方が身近に感じる瞬間がして」

事務室に顔を出す浅野

浅野 「向井くん あら？ 新しい子？」

向井 「浅野さん 彼は…その」

XXXX

浅野 「ルール わかってるよね？」

向井 「ドナーの情報は開示しない」

浅野 「どんなわけがあるの？」

向井 「脳死って死ですか？」

浅野 「…？ 臨床的には」

向井 「それは 医療に携わるものの理論で

一般的にその考えは成立するのでしょうか？」

浅野 「脈動があり、呼吸をしてるから…

一目で違いはわからないと思うけど」

向井 「人が亡くなった時に感じるのは

人はたくさん関係性の中で生きてい
るってこと

その人を大切に思う人はご家族だけじゃ

なくて…

医療行為として十分理解するには、

知識だけじゃなくて何かもつと

…うまく言葉にできないですが」

浅野 「レシピエントにもしゃべっちゃたの？」

向井 「千砂ちゃんは知りません」

浅野 「彼は返せなんていう人なの？」

向井 「それはないと思います」

浅野 「ややこしいルールよね

私たちが何か後ろめたいみたい」

○病院の廊下

向井が先導し、晴があとに続く

○翔の病室

ベッドに翔が眠っている

体には様々な管が通り、心拍計が微かに動

いている

向井 「2% なんの数字かわかるかな？」

晴 「…なんででしょうか」

向井 「国内で移植を受けられる確率
少ないだろ？」

晴 「はい」

向井 「臓器によって待機者は大きく変わる

技術的にも高度で 年間100例前後し
か受けることはできない

少ないチャンスなんだ」

晴 「他にいい方法はないのですか？」

向井 「誰かの臓器に頼らざるを得ない

最後の…最後の手段だから」

晴 「…」

向井 「すみれさんはこの子のために生体間移植
を申し出たらしい まっすぐな人だ

他人の子供のはずなのに」

晴 「京都に行くようになってから たまに

じっと考え込んでいたのは…」

向井 「すごい人だね

今度、千砂ちゃんの手紙をもってすみれ

さんのご両親に会いに行くんだけど

いっしょにどうかかな？

ありがとうを言いに行こう」

晴 「それと…さよならも」

晴の頬に涙が一筋

○海辺の線路

海沿いを走る電車

○駅

駅前広場に降りる向井と晴

水色の車の横にすみれの父親を見つける

遠目からお辞儀であいさつを交わす

森崎父 「遠いところまでご足労様です」

向井 「はじめまして

移植コーディネイターの向井です

わざわざ向かいに来ていただきあり

がとうございます」

森崎父 「不便なところですから：

それにお客人なんてなかなかないも

のですから」

晴の抱えた紙袋とすみれのカメラバツ

クを見つめる森崎父

森崎父 「：晴くん ひさしぶりだね」

晴 「ご無沙汰しております」

森崎父 「君と向井さんが知り合いだったなんて驚いたよ」

晴 「あの：俺：」

森崎父 「こんなところで話すのもなんだから
うちに行こう さあ 乗って」

車を指差す森崎父

ちいさな相槌を返す

○すみれの実家

仏壇に飾られたすみれの写真

線香が二本、細煙をあげている

晴の撮影した写真を眺める森崎夫婦

森崎母 「不思議なご縁ね

ねえ 見て この子」

千砂の写真を森崎父に見せる

森崎母 「すみれにちよつと似てるね」

森崎父 「…そうか？」

森崎母 「そう思いたいのかな…」

森崎父 「…似てるかもな」

向井

「この度は臓器提供に承諾していただき、誠に有難うございます

すみれさんを亡くされとてもお辛い時に移植医療にご理解いただけたこと重ねてお礼を申し上げます

今日はすみれさんのレシピアントからお礼の手紙を預かってきたので直接お渡したく参りました」

カバンからサンクスレターを取り出す封筒を開ける森崎父

以下、千砂ナレーション

千砂 「親愛なるドナー家族の皆様へ

この手紙に私の名前を書くことはできないけれど私は生きています

八月六日は私にとって二つ目の誕生日

になりました

「特発性拡張型心筋症」これが2年前の私
に下された病名です

病院のベッドでいつ来るかわからない
死をどこか受け入れ始めてたころ提供
の知らせを頂きました

手術を終え数日が経ち力強く鳴る心臓
の鼓動に驚きました

たった二日で私の人生は変わりました

亡くなったドナー様と二人

親友として、家族として、姉妹として
私たちは二人

二人三脚で私の人生とあなたの人生を
一生懸命、生きていきます」

涙を流す森崎夫婦

○墓地

森崎家の墓

すみれのブーケがお供えされている

手を合わせす晴

「没年2019/08/06 森崎すみれ」

墓誌に刻まれたすみれの名前を指でなぞる

晴

「向井さん ありがとう」

ひとりじゃ来れなかった」

○駅

改札

改札を通り抜ける向井

振り向くと改札の前で晴が立ち止まっ

ている

晴

「すこし写真撮ってから帰ります」

向井

「また会おう」

晴

「はい」

お辞儀をして駅を後にする晴

○
港

海面に漂う夕焼けの橙

シャッターを切る

沈む太陽を眺める晴

傍にはすみれが座っている

並ぶ二人のシルエツト

結んでいた晴の唇が微かに動く

“さよなら”

立ち去る晴

見送るすみれの唇が囁く

“さよなら”

誰のいない港、夕日が沈んでいく

完